

# 第1学年 社会科学学習指導案（当日修正版）

1年3組 男子20名 女子20名 計40名

指導者 早川 晃央

【授業】13:30～14:20 会場 マルチ教室（3階）

【協議会】16:10～17:00 会場 第一研修室（1階）

## 1 単元名 古代までの日本 - 原始と古代の移行期 -

## 2 単元について

### （1）単元設定の趣旨

本単元は、平成29年告示の中学校学習指導要領の歴史的分野の大項目B中項目（1）「日本列島における農耕の広まりと生活の変化や当時の人々の信仰、大和朝廷による統一の様子と東アジアとの関わりなどを基に、東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを理解すること」を目標としている。平成20年度告示の学習指導要領以降、「我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解する」ことというねらいがあり、「大観学習」の重要性が示されている。

そこで本単元では原始から古代への移行期を取り扱う。生徒は今後、古代、中世、近世、近代、現代がそれぞれどのような時代であったかの「大観学習」を各単元のまとめとして行う。その際に、どのようにして時代が転換するのかを生徒が理解していないと「どのような時代であったか」を考察することは難しい。ゆえに、原始と古代の時代区分を学習することで、生徒に時代の転換点を理解することの重要性を捉えさせたい。

原始と古代の境目については諸説あり、中学校の検定教科書の中に原始と古代の境界を明確に定めたものはなく、「古代までの日本」とする教科書が多い。それを踏まえつつもここでは、聖徳太子（厩戸王）が登場する6世紀後半以降を、古代の始まりとして捉えることとする。それは、古代の特色の一つに、統一国家の成立が挙げられるからである。統一国家の成立についても諸説あるが、本校で使用する帝国書院の教科書にはヤマト王権について、「中国から倭王の称号を与えられた、後の大王を中心とする豪族たちの緩やかな連合勢力。「大和朝廷」とよばれることもあります。「朝廷」とは政治を行う機関であり、当時は整った組織はまだなかったので、「王権」と表記します。」とある。そして、6世紀末に蘇我氏が政治の実権をにぎる部分の記述には、「蘇我氏は（中略）対立する大王を殺害し、額田部王女（後の推古天皇）を大王としました。」や「中国にも認めてもらうため、国の政治を整えました。」とあることから、統一政権としての役割があったと本単元では解釈し、古代の始まりとして扱うこととする。そしてこれを支える根拠として、九州歴史資料館の解説がある。同博物館の展示解説シートを参照すると「日本の歴史において、7世紀より前は原始時代に相当し、旧石器時代から古墳時代が該当します。（中略）弥生時代には稲作を行い、ムラがつくられました。やがて、ムラはより大規模なクニとなり、さらに、巨大な古墳を築く豪族も出現します。そして、近畿の大和朝廷が、多くの豪族を従属させ、統一国家を作り始めます。」とある。よって、授業では推古天皇や聖徳太子が活躍する7世紀以降を古代として取り上げる。

縄文時代には東日本を中心に、各地で採れる石の交易ルートが存在し、よりよいものを互いに交換しながら生活していたことが分かっている。それが弥生時代になると、稲作や青銅器を始め、大陸からさまざまな文化が日本にもたらされたことで文化が発達し、人々は定住生活を送るようになった。また、食糧の安定供給が可能になったことで、日本全体の人口も大幅に増えている。しかし、稲作がもたらしたものは食料だけでなく、争いもある。各地のムラやクニが争う中で、自然と大きなクニをまとめる首長が現れ、人々が身分によって序列化されていった。これはつまり、支配手段の変化を意味する。それまでは卑弥呼に代表される呪術による支配が、男女問わずそれぞれのムラで行われていた。しかし、争いが激しくなるにつれ、クニの運営が成り立たなくなり、武力をもつ者が、クニの中心となっていくようになる。クニが安定すると、それぞれの首長は、自らの権利を正当化したり、より強固なクニを目指したりする過程において進んだ文物のある大陸へこれまで以上に使いを送る。だが、当時の中国の官爵体系では、支配者層にあたる「將軍」の称号は男性に与えられることになっていた。これらの争いの激化や中国の政治体制といった理由から国内では女性首長が大幅に減少し、男性首長が増加していく。その中で日本にもたらされたものの代表が金印や朝鮮半島の鉄である。これらを国内での支配ツールとして用い、特に力をもった豪族を中心に形成されたのがヤマト王権である。ヤマト王権が国内における大陸との窓口となったため、国内の地方

豪族はヤマト王権を通して、大陸の進んだ文物を入手することになる。古墳時代を象徴する前方後円墳は、各地の豪族がヤマト王権の許可の下で築き上げ、全国に広まるようになっていった。

古代に入ると、推古天皇以降の国内の政治については中国の動きが大きく関わってくる。589年中国において大帝の隋が誕生した。それに伴い周辺のアジア諸国は、隋の属国でありながら、隋に攻め込まれないよう、急速に国内の統一性が求められることになる。そこで、推古天皇の摂政となる聖徳太子は中国にならった統一国家づくりを行った。統一国家を形成するためには君主の下で、忠実に仕事をして人民をまとめ上げる官僚が必要となる。そのため、中国で行われていた官僚制度を取り入れ、政治のしくみが整えられていった。それが十七条の憲法や冠位十二階である。これらが制度として機能していたかどうかの検証は必要であるが、専制君主制の形としての制度を整えることで、日本（倭国）という統一国家としての古代が始まったことは事実である。

これらのことから古墳時代の特色として、①各地で争いが起こり、首長の支配手段が「呪術」から「武力」、女性から男性へとなくなっていったこと、②力をもつ豪族の連合政権であるヤマト王権が成立したこと、③地方豪族は大陸からの鉄や文化を求めて、ヤマト王権との間に主従関係を築いたこと、の3点を生徒に気付かせたい。

## （２）生徒の実態

これまでの授業の様子から、社会科の学習に意欲的に取り組む生徒が多い印象はあるが、本単元は歴史的分野の最初の単元である。

本学年の生徒においてもこれまで同様、地理・歴史的分野ともに、単元のはじめに「どのような」「どのように」といった基礎的・基本的な社会的事象を確認する学習を行う。それを基に、「なぜ」といった課題に取り組むことで、原因や仕組み、法則などの概念的知識を獲得する学習を行っていく予定である。そして、単元の終わりに「どちらにすべきか」や「最も重要なものは何か」といった課題に取り組む、価値的知識を獲得する学習を行いたい。特に、価値判断する学習では、討論を学習活動に取り入れる。その理由は、討論を通して、自分の意見を発言したり、他者の意見を聞いたりすることで、全体での議論を深める過程において、自分の立場との共通点や相違点について社会科の「見方・考え方」を働かせながら比較・分類することが可能であり、異なる視点や価値観に気付くことができるからである。そのため、思考力・判断力・表現力等を育む効果が期待されるからである。

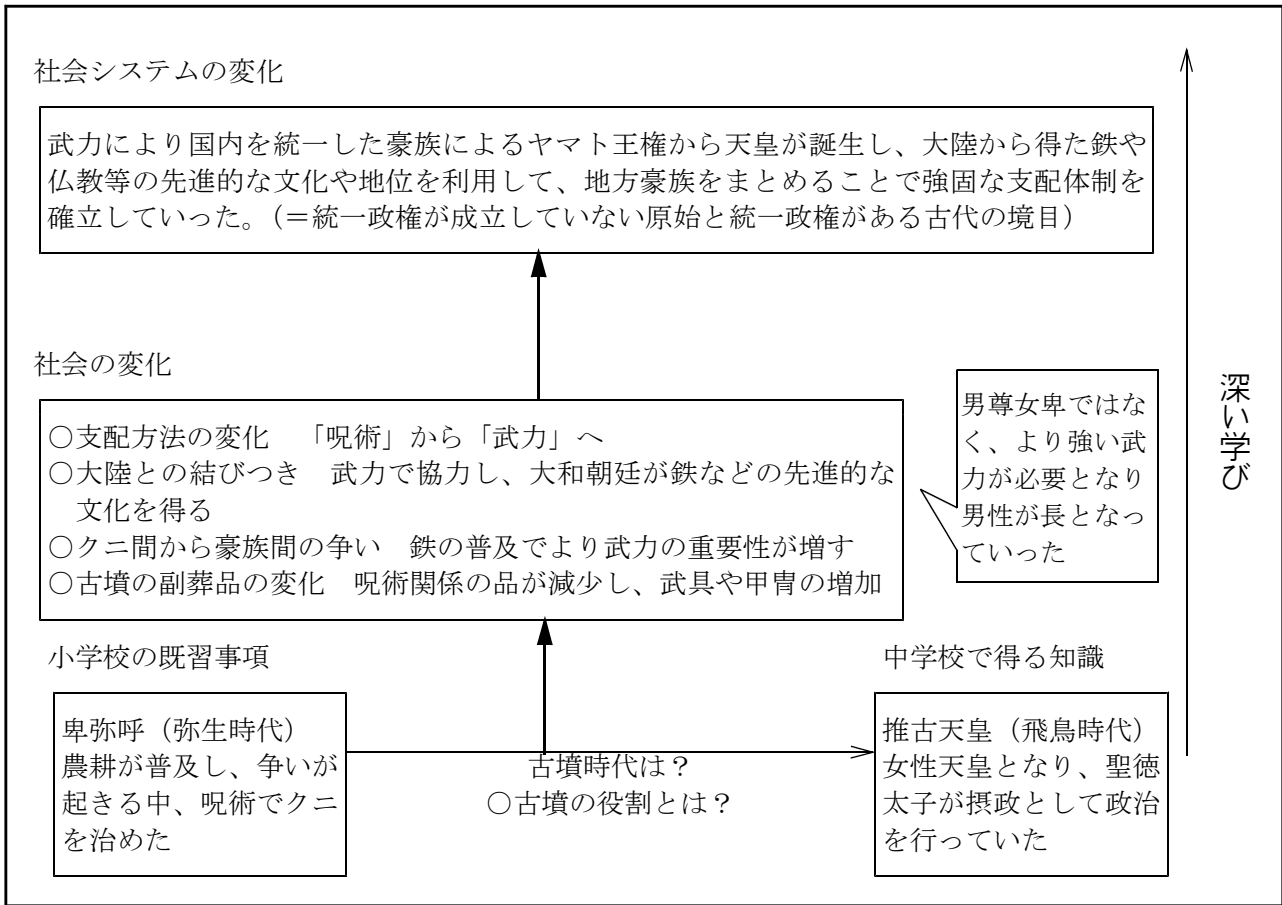
## （３）指導の構え

本単元は、中学校歴史的分野の最初の単元である。入学間もない生徒が意欲的に学習に取り組めるよう、小学校の既習事項を確認したり、活用したりする問いを意図的に仕組み、スムーズに中学校の社会科の学習に取り組めるよう留意したい。例えば、第1次では歴史的な見方・考え方を働かせて、歴史的な事象を理解させることがねらいである。歴史的な見方・考え方を働かせるために、はじめに元寇について描かれた蒙古襲来絵詞を取り上げる。蒙古襲来絵詞に描かれた武士と対峙する元軍が後世に書き足された事実から、当時の将軍と御家人の関係性や当時の政治との「関連」、書き足される前後の「比較」といった「歴史的見方・考え方」を確認したい。また、第4次では導入で小学校の既習の人物を確認する。小学校でははじめに邪馬台国の女王として卑弥呼を学習する。そして次に学習する人物は聖徳太子である。これを生徒に確認した後、それぞれの人物が活躍した年代に300年の差があることから、その間の古墳時代はどのような時代だったのか、また第3次で学習する時代区分の原始と古代の境目は何かを追求させる。このように小・中の接続を意識した問いをすることで、生徒が既習事項を活用し、主体的に学びに向かうための支援を行いたい。また、それと同時に中学校の歴史学習で必要となる「歴史的な見方・考え方」の定着や時代の「大観学習」の基礎となる単元とすることで、今後の学習の土台としたいと考えている。

3 「見方・考え方」を働かせ、「深い学び」を実現する授業づくり

(1) 視点① 「深い学び」が実現している状態

図1 本単元における「深い学び」の構想図



本単元では、原始から古代に入るまでの流れを学習する中学校の歴史学習における最初の単元である。第1次は、中学校での歴史学習の導入であり、これから学ぶ上での土台となる歴史的な「見方・考え方」にはどのようなものがあるかを学習する。小学校の既習事項である蒙古襲来絵詞が近世に書き足されている事実に触れ、その理由を蒙古襲来時の政治や武士の生活の様子から検討する。その際に「いつごろ描かれたのだろう」「なぜ事実と違う描き方をしたのだろう」「当時の政治の様子とどのような関連があるのだろう」という歴史的な「見方・考え方」を働かせることで、生徒が主体的に課題設定を行ったり、課題解決を行いやすくなったりすることに気付かせる。つづけて、縄文時代と弥生時代を比較する学習を行う。縄文時代から弥生時代にかけて行われた交易によって食料や文化に変化がもたらされ、人々の生活様式に変化が起こるとともに、身分制度が作り上げられ、争いが起こるようになったことを学習する。本時では、小学校の既習事項である卑弥呼が争いの絶えないクニを呪術でまとめ、邪馬台国の女王となったことを起点に、女性を切り口として、原始から古代への移行期となる古墳時代の特色を大観し、転換点となる時代の特色や変化を捉えたい。古墳時代は争いの中で、連合政権が生まれたことや中国の冊封体制に入っていたこと、また中国の力を借りながらヤマト王権が広い範囲を支配していたことに気付かせる。このことから、古墳時代は従来よりもより強い武器を用いた争いが頻発し、支配手段が「呪術」から「武力」に変化したことで、女性の長が減少したことを捉えさせる。

これらのことから統一政権がなく、ヤマト王権という連合政権しかなかった時代までが原始であり、統一政権が誕生した時代からを古代としていることを表現できる状態が本単元における生徒の「深い学び」の状態である。

(2) 視点② 本単元で働かせる「見方・考え方」

社会科では、「歴史的な見方・考え方」を働かせる問いを図2のように整理・分類している。それを基にして、本単元の各次で働かせる「歴史的な見方・考え方」を以下に示す。

本単元は中学校の歴史学習のはじめの単元となる。また、本校は多くの小学校から生徒が入学してきているため、第1次では小学校での既習事項である元寇について描かれた蒙古襲来絵詞を中心資料として、歴史的な見方・考え方にはどのようなものがあるかを確認することとする。

以下の表では、本単元における各次で、生徒が働かせる歴史的な見方・考え方を示している。なお、◎は特に重視したい見方・考え方を示している。

図2 歴史的な見方・考え方と問い

「歴史的な見方・考え方」と「問い」	
見方	・時系列（時期、年代） →どの時代か。 →何年か。
	・諸事象の推移（展開、変化、継続） →どのように展開（変化）したのだろうか。
考え方	・諸事象の比較（類似、差異、特色） → ～と～では、異なる点（共通点）は何か
	・事象相互のつながり（背景、原因、結果、影響） → ～は、どうして起きたのだろうか。 → ～と、どのような関連があるのだろうか。
	課題解決 →どのような課題があり、どうしたらよいか。
	価値判断 →どちらがよいか。
	意思決定 →どうすべきか。

次	内容	時	歴史的な見方		歴史的な考え方	
			時期・年代	展開・変化	差異・特色	背景・結果・原因・影響
第1次	歴史的な見方・考え方はどのようなものがあるだろうか	1	○	◎	○	○
第2次	歴史の区分にはどのようなものがあるだろうか	1	◎		○	
第3次	なぜ縄文時代の遺跡は東日本に集中するのだろうか	1	○	○	◎	○
第4次	古墳時代はどのような時代だったのだろうか	1	○	○	◎	◎
第5次	原始と古代の境目はどのように区分すればよいだろうか	1	○	○	◎	○

4 単元の目標

- 歴史的な見方・考え方を確認し、それらを働かせながら倭国の原始から古代へ移り変わる社会のようすを主体的に捉えようとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】
- 原始から古代への移行期について、社会の変化を政治・文化・外交等の多面的に考察し、政治の実権をもつ術が呪術から武力へと変化していくようすや農耕や鉄等の新たな文化が普及していく過程を複数の資料から考察し、表現することができる。 【思考・判断・表現】
- 原始から古代への移行期について、人々の間に身分差が生まれ、主従関係が形成されたり、大陸からの影響を受けながら生活に変化が現れたことを、資料を読み取りながら理解することができる。 【知識及び技能】

5 学習指導過程（全5時間）

- 第1次 歴史的な見方・考え方はどのようなものがあるだろうか…………… 1時間
- 第2次 歴史の区分にはどのようなものがあるだろうか…………… 1時間
- 第3次 なぜ縄文時代の遺跡は東日本に集中するのだろうか…………… 1時間
- 第4次 卑弥呼から推古天皇や聖徳太子が活躍する間にある古墳時代はどのような時代だったのだろうか…………… 1時間(本時)
- 第5次 原始と古代の境目はどのように区分すればよいだろうか…………… 1時間

	教師による指示・発問	教師と生徒の活動	生徒の反応
第1	この絵（元寇）は何を描いていますか。	T：発問する。	・蒙古襲来（元寇）

一 次	2 それは何時代の出来事ですか。	S：答える。 T：発問する。 S：答える。	・鎌倉時代です。
歴 史 的 な 見 方 ・ 考 え 方 に は ど の よ う な も の が あ る か	3 どのような絵であると小学校で習いましたか。 4 この絵は絵巻の一部です。もう少し左の方まで見てみましょう。 5 この逃げ惑う人たちは誰でしょう。 6 なぜ同じ元軍でも武士を苦しめる人と逃げ惑う人がいるのでしょうか。 7 絵を見て気付くことは何でしょうか。 8 それは、なぜでしょうか。 9 なぜ書き足したのでしょうか。 10 それでは、なぜ当時の人は異なる描き方をしたのでしょうか。 ※諸説あり、定説はまだない。 11 この事例から、資料を読む際は、どのようなことに気をつければよいですか。 12 今日は鎌倉時代の出来事をとりあげました。次回は、様々な年代や時代の表し方を学習しましょう。	T：指示する。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：予告する。	・日本の武士が元軍と戦い、苦戦を強いられている様子です。 ・逃げ惑う人たちがいる。 ・元軍の人たちです。 ・分からない。 ・武士を苦しめる部分だけ、色使いが鮮やかだ。 ・後から描き足している。 ・武士のあるべき姿を伝えるため。 ・御恩と奉公の関係があり、自分が一所懸命戦ったことを將軍にアピールすることで、たくさんのご恩を得るため。 ・多面的に資料を考察すること。 ・資料を比較したり、推移を確かめたりすること。 ・資料の真偽を確かめること。 ・時期や年代を確かめること。
第 二 次 時 代 区 分 に は ど の よ う な も の が あ る か	13 前回取り上げた元寇は、何時代の出来事でしたか。 14 鎌倉時代とはいつですか。 15 ほかの言い方はできますか。 16 そうですね。1192年や1333年の言い方は何を基準にしていますか。 17 キリストを基準に考えるため、「西暦」といいます。キリストの誕生以前は紀元前、誕生後は紀元として表します。また、100年を区切りとして、世紀という言い方もあります。それに対して「令和」や「平成」のように日本の時代区分で表す方法を「和暦」といいます。また、中世というのは、歴史を6つの時代区分に分けたときの言い方です。 18 中世以外では、どのような区分がありますか。 19 中学校では、それぞれの時代や時代区分について、大きく捉えて学習します。たとえば、 <u>原始と古代の境目は何</u> ですか。 20 この問いの答えを考えながら学習を進めていきましょう。	T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：答える。 T：説明する。 T：発問する。 S：答える。 T：発問する。 S：予想する。 T：説明する。	・鎌倉時代です。 ・1192年（1185年）から1333年です。 ・中世ともいえます。 ・12世紀～14世紀ともいえます。 ・キリストの誕生です。 ・原始、古代、中世、近世、近代、現代があります。 ・支配体制が整ったかどうか。 ・仏教が普及したかどうか。 ・天皇が登場したかどうか。…

第三次 なぜ 縄文時代 の遺跡は 東日本に 集中する のか	21 縄文時代と弥生時代の遺跡の分布からどのようなことに気付きますか。	T: 発問する。 S: 答える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文時代の遺跡は、東日本に多くて、弥生時代の遺跡は西日本に多い。</li> <li>・気候の影響かもしれない。</li> <li>・食料が違うからかもしれない。</li> <li>・縄文時代の方は植物が主な食料で、弥生時代の方は米を主食としていた。</li> <li>・東日本と西日本で植生が異なっていて、東日本の方がカロリー摂取が容易だった。</li> <li>・東日本には石の交易ネットワークがあり、道具が豊富にあった。</li> <li>・縄文時代は気候の違いや交易のネットワークが整備されていたことで、西日本に比べ、東日本の方が食べていくことが容易だったが、弥生時代になり、大陸から稲作が九州に伝わると西日本の方が安定して食料を得ることが容易になったから。</li> </ul>
	22 それはなぜだと思いますか。	T: 発問する。 S: 予想する。	
	23 それでは、資料から検証しましょう。	T: 説明する。	
	24 配付資料からどのようなことが読み取れましたか。	T: 発問する。 S: 答える。	
	25 読み取った資料の内容をまとめると、なぜ縄文時代の遺跡は東日本に多くて、弥生時代の遺跡は西日本に多いのですか。	T: 発問する。 S: 答える。	
	本時は、6(2) 展開参照		
第五次 原始と ...	26 これまでの学習を振り返って、推古天皇や聖徳太子が活躍する6世紀後半から「古代」になります。「原始」と「古代」の違いは何ですか。	T: 発問する。 S: 答える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天皇を中心として、統一国家がある時代を古代といい、それ以前を原始という。</li> </ul>
	27 それでは、古墳時代を中心として、弥生時代から飛鳥時代の始まりの部分を図解してみましょう。	T: 指示する。 S: 図解する。	

## 6 本時の学習 (全4 / 5時間)

### (1) 指導目標

- ・古墳時代に関する小学校での既習事項や女性の長の数の変化を切り口として、時期や推移等の歴史的な見方・考え方を働かせながら、古墳時代の特色を思考する活動を通して、政治や外交等の多面的な考察・判断を行い、大陸に左右されながらも国内で起こる鉄による争いによって支配手段が呪術から武力へと変化し、武力で勝る者が支配者となる主従関係が形成され、統一政権形成へと向かっていった時代であることを表現させる。 【思考力・判断力・表現力】
- ・学習課題を解決するために必要な資料を考察したり、収集した情報を歴史的な見方・考え方を働かせて読み取ったりまとめたりする活動を通して、ヤマト王権や前方後円墳の役割や形成過程等の基礎的な知識や歴史的な資料を確かに読み取る技能を習得させる。 【知識・技能】

### (2) 展開 (本時は「5 何をどのように調べれば、課題解決できるかを考えて、発表する。」から行う)

学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
1 小学校で既習の原始・古代に活躍した人物を想起する。 弥生時代：卑弥呼 古墳時代：(ワカタケル) 飛鳥時代：蘇我氏、聖徳太子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習事項の確認を行う。</li> <li><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">見</span> 【時期、年代】</li> <li>・弥生時代から飛鳥時代までの間に何年あるかと問い、約350年の古墳時代の間にどのようなこ</li> </ul>

とがあったか考えさせる。

古墳時代はどのような時代だったのだろうか

- 2 古墳時代に関する小学校での既習事項を想起する。
- ・古墳が各地に造られた。
  - ・ワカタケルが支配していた。
  - ・鉄が朝鮮からもたらされた。
- 3 提示資料を読み取り、古墳時代に女性の首長が減少することに気付く。
- 4 ①古墳はなぜ各地に広がったのか②なぜ女性首長は減少したのかという視点を参考にして、学習課題の答えを予想して発表する。
- ・争いが激しくなり、女性より力の強い男性が首長になることが多かった時代である。
  - ・鉄を求めて各地の豪族が争った時代である。
  - ・少しずつヤマト王権に権力が集中した時代である。

- ・問答を行い、なぜ同じ形の古墳が広まったのかという古墳の政治的意義に疑問をもたせる。
- ・古墳はなぜ広まったのか。
- ・古墳はなぜ同じ形なのか。など
- ・古墳時代の長の男女比を示す資料を提示して、古墳時代には女性の首長が減少することに気付かせることで、生徒に新たな課題意識をもたせ、主体的な課題解決を促す。
- ・導入の資料や小学校での既習事項等を基にして、予想するよう指示する。予想を立てられない生徒には、小学校での既習事項を想起するよう指示する。

(↑前時)

(↑前時)

(↓本時)

(↓本時)

- 5 何を明らかにすれば、課題解決できるかを考えて、発表する。
- ・古墳時代の政治や外交の様子を調べる
  - ・女性の首長に関する記述が分かる中国の歴史書を調べる
  - ・弥生時代・古墳時代・飛鳥時代にどのようなちがいがあるか調べる

- ・弥生時代との変化や古墳時代の特色に着目させる問いを行うことで、調べる内容を明らかにし、働かせる見方・考え方が明確になり、今後の探究活動につなげる。

**見・考** 【変化、差異、特色】

- 6 配付資料等から読み取れることを、ワークシートに書き出して、発表する。
- [古墳の副葬品]
- ・年代が進むにつれ、甲冑や武器が副葬品として増えた。
  - ・古墳時代前期は玉飾り等の呪術に使う副葬品が見られるが、年代が進むにつれ、徐々に減少している。
- [教科書の記述]
- ・古墳時代には朝鮮からの鉄を求めて各地の豪族が争った。
  - ・朝鮮でも激しい争いが起こっている。
- [国内の様子]
- ・同じ形の古墳をつくることで、国内の政治的ネットワークがあったことを示す。
  - ・鉄が全国に普及したことで、主従関係が明らかとなり、激しい争いは次第に減少してした。
  - ・隋が成立した6世紀末以降、急速に中国に見劣らない制度を整える必要があった。
- [大陸の様子]
- ・中国は男性でないと「将軍」の位がもらえなかった。
  - ・中国では隋や唐が強い勢力を持っていたため、冊封体制をとらざるを得なかった。

- ・机間指導を行い、資料の読解が難しい生徒には、教科書から必要資料を探すよう指示する。
- ・課題解決の道筋として、小課題の答えを説明できる生徒に挙手で発表させる。
- ・生徒の発表の中で不足している部分について、問答を行うことで、生徒が知識を構造化できるようにする。

例) ・政治的ネットワークとはどのようなことか。

・古墳とはどのような意味をもつ墓か。

・なぜ地方豪族は、ヤマト王権に従ったのか。また、従うメリットは何か。

- ・事象どうしを関連付けさせるような問いを行う。板書は資料から読み取った内容を構造化しやすいように線で結ぶ等の工夫をする。

- 7 ホワイトボードに課題解決のための必要な要素となることがらをまとめる。

- ・ペアで、ホワイトボードにまとめる作業を行うよう指示する。

- ①地方豪族はヤマト王権に従属することで、鉄が与えられる。また、従属の証が同じような形の古墳をつくることである。
- ②武力に優れた有力豪族による連合政権がヤマト王権であり、ヤマト王権だけが大陸から鉄を入手することができた。

8 本時のまとめをワークシートに記入して発表する。

古墳時代は、各地で争いが起こり、首長の支配手段が呪術から武力に変化し、首長も女性から男性へと変わった。そして、力をもつ豪族の連合政権であるヤマト王権が成立した時代でもある。その背景には、地方豪族は大陸からの鉄や文化を求めて、ヤマト王権との間に主従関係を築いた。

- ・机間指導を行い、構造化が難しいペアには、鉄とヤマト王権がどのように結びつくか等の問答を行い、既習の知識や資料から得た知識を生徒が結びつけられるようにする。

**考** 【特色】

- ・ペアで作成したホワイトボードを基にして、ワークシートに古墳時代が前後の時代と比較して、どのような時代であったかを記入するよう指示する。

**考** 【差異、特色】

### (3) 学習評価の視点

- ・ 時期や推移等の歴史的な見方・考え方を働かせながら、女性の長の数の変化を切り口として、古墳時代の特色を思考する活動を通して、政治や外交等の多面的な考察・判断を促し、対外的かつ鉄による争いの発生が、武力による支配を助長した時代であることを表現させることができたか。  
【思考・判断・表現】(観察・ワークシート)
- ・ 学習課題を解決するために必要な資料を考察したり、収集した情報を歴史的な見方・考え方を働かせて読み取ったりまとめたりする活動を通して、ヤマト王権や前方後円墳等の基礎的な知識や技能を習得させることができたか。  
【知識及び技能】(観察・ワークシート)

## 7 授業観察の視点

- ・ 「変化」や「差異」などの歴史的な見方・考え方を生徒が働かせるための問いや指示を行ったことは深い学びを実現するうえで、有効な手立てであったか。
- ・ 多面的に古墳時代をとらえる学習活動や問いは、古墳時代の特色を捉え、原始から古代の推移を考えるうえで、有効であったか。

[主な参考文献]

#### 【方法論】

- ・ 富山大学人間発達科学部附属中学校『主体性の高まりをめざして - 課題学習で学校をつくる - 』富山大学出版会、2009年
- ・ 全国社会科教育学会編『新社会科授業づくりハンドブック』明治図書出版、2015年

#### 【内容論】

- ・ 石川日出志『農耕社会の成立』岩波新書、2010年
- ・ 国立歴史民俗博物館「性差の日本史」一般財団法人歴史民俗博物館振興会、2020年
- ・ 清家章『埋葬から見た古墳時代 女性・親族・王権』吉川弘文館、2018年
- ・ 中公新書編集部編『日本史の論点 邪馬台国から象徴天皇制まで』中公新書、2018年
- ・ 虎尾達哉『古代日本の官僚』中公新書、2021年
- ・ 尾藤正英『日本文化の歴史』岩波新書、2000年
- ・ 吉村武彦『女帝の古代日本』岩波新書、2012年
- ・ 吉村武彦『ヤマト王権』岩波新書、2010年
- ・ 九州歴史資料館展示解説シート15、2018年改訂版